

---

# 僕は魔王

宵の口

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕は魔王

### 【Nコード】

N9652B

### 【作者名】

宵の口

### 【あらすじ】

彼の名前は、上月（こうつき）渉（わたる）。だが、渉は普通の手品師ではない。何が違うのかと言うと、渉は魔法が使えるのだ。そのことで、絶対にはれない手品を作り上げてきたのだ。そんな渉が、いきなり異世界に飛ばされてしまう。そこで出会った人にいきなり、「魔王様」といわれたしまうのだ。そんな、いきなり異世界に飛ばされてしまった渉の笑いあり涙ありのストーリーの第一話。

## 第一話 始まり

小さなステージの上、僕は自慢の手品を披露する。僕の名前は上月<sup>つき</sup> 涉<sup>わたる</sup>、身長は一六〇センチくらいしかない。そんな僕でも、ステージに上がれば周りを見渡せる。幼いといわれる顔つきも、あまり分らない。だから、僕はこのステージの上が好きだ。

辺りを見回すと、二百人ぐらいの観客が、僕の方をじっと見ている。ほぼ空席は見られない。

その大好きなステージの上で、僕が得意な手品を次々に行く。それは何かを燃やしたり、氷付けにしたりする手品だ。それらの手品をすると、お客さんはとても喜んでくれる。

単純に喜んでくれる人もいれば、タネを明かしてやろうと見つめる人。こういったお客さんの反応は、見ていてとても楽しい。

カードマジックをしたり、物をいきなり出したりと言った、一般的で地味な手品をする。こういった小さいステージでは、あまり派手なことはいできないからだ。

だけど、終わりの時間が近づいてきた。僕の出番はこれで終了だ。「最後に、一番得意な手品で終わりたいと思います」

そう言って、僕は手に花の種を持った。そして、その種に力を込める。世界に満ちている力を全身に。そして、全身から種に向かって、力が流れていくようなイメージをする。

すると、手の中にあつた種が一斉に咲いた。そして、その花を観客席に向かって投げた。

「それでは、また会う日まで」

僕はそう言って、ステージを後にした。そして、早く衣装を伊が得たかった僕は、足早に楽屋に向かう。

テンドー様と書かれた楽屋がある。テンドーというのは僕の芸名だ。

楽屋の中は、鏡に小さなテーブルがたたみの上に置かれていて、端

つこの方に服をかけるハンガーなどがある。

僕は壁の方においてあった鞆から、私服を出して着替えた。今は冬と言うこともあり、かなり厚着をしてきた。そして、ハンガーにかけてあったダウンジャケットを手に取り楽屋を出た。

今日の出番はこれで終わりなので、スタッフの人に挨拶だけして、足早に会場を去った。

「寒い、何で今日はこんなに冷えているんだろうな」

そんなことを呟きながら、手に持っていたダウンを着た。高校卒業したてで入ったこの世界も、八ヶ月も経てばなれていた。

高校時代から、ステージが上がったりしていたので、仕事は多い方だと思う。実際に、資金援助無く、一人暮らしが出来ているくらいだから。

「手品師か。僕も純粹に、それだけで食べていけたらいいのに」

そんなことを呟きながら、人差し指から火を出した。僕は、手品師でもあり、魔術師でもあるのだ。手品は、小学校五、六年ぐらいからやっていて、かなり上手い。だけど、僕以上に上手い人がたくさんいるので、魔術に頼っているというのが現状だ。

魔術と言っても、ファンタジーにありがちな、魔法みたいなことは出来ない。せいぜい、ガスバーナー程度の火を出したり、握り拳ぐらいの氷を出したり。少し凄いと言えば、今日の最後にやったように、植物の生育を進めるぐらいだ。

魔術というものは、マナといわれる、世界に満ちている不可視な力で行使する。普通の人間では、感じることも、利用することも出来ないこの力。だけど、僕は十歳ぐらいのときから、この力を感じ、利用できるようになっていた。そのせいで、家族からは不気味がられていた。だから、その力を隠していたのだ。だけど、今までに一人だけに、この力のことを話したことがある。彼女は、そんな僕を凄いと言い、明るい笑顔を僕に向けてくれた。そのときに、力を隠しながら、人に見せられる手品師になろうと思ったんだ。

魔術について解釈だが、僕が色々な資料を読んで、勝手にこうい

った考えをしているだけなので正しいかどうかは分からない。

「でも、世界に満ちている力が弱いから、大変なんだよな」

僕はそんなことをぼやきながら、交通量が多い大通りの歩道をとぼとぼ歩く。そして、会場から歩いて五分ほど歩いたところにある、小さなアパートの一室。つまり、僕の家に戻った。

「ただいま」

誰もいない、狭い部屋に向かって言った。部屋の中にはテーブルと、小さな暖房器具しかないので、かなり殺風景だ。家族には、手品師になると言って家を出たときに、勘当されたので一人暮らしをしているわけだが。

「正直、しんどいよな」

すっかり冷え切った体を温めるため、部屋の暖房をつける。そして、ダウンジャケットを、寝室にしている部屋のハンガーにかけた。その部屋には、ベッドとタンスぐらいしかない。

それから、疲労に満ちた体に鞭打ち、シャワーを浴びに風呂場に向かった。そして、そこで今日の疲れと汚れを洗い流す。油断すれば、シャワーを浴びながら寝てしまいそうなので、僕は急いで風呂からあがる。やはり部屋の中はまだ寒かったので、急いで体を拭いてパジャマに着替える。

風呂の中ではあんなに眠かったのに、少し冷えたら目が覚めてしまった。

僕は空腹だったので、冷蔵庫にあったもので、てきとくに晩飯を作った。そして、それを食べた後、時計を見る。

午後十一時より少し前なので、眠るには少し早い。僕はやかに水を入れて、両手で加熱しながら、沸騰するのを待った。自分の両手がやけどしなのは、マナに手を守らせているからだ。

だけど、一人でこんな生活するのは、少し寂しいかもしれないな。そんなことを考えているうちに、お湯が沸騰していた。

僕は慌てて加熱するのをやめて、インスタントコーヒーが入ったカップを持ってきた。そして、その中に熱湯を入れる。

僕はのんびりと、ブラックコーヒーを飲みながら、まったりと過ごすのが好きなのだ。それに、食後のブラックコーヒーは、格別に美味しいからな。

そんなことを考えながら、コーヒーを飲み終えた僕は、寢室に向かった。そして、疲れていたので、すぐに眠りに落ちられると思っていた。だけど、この日はいつもと違いすぎた。

僕が眠ろうとして、目を閉じると、辺りはまばゆい光に包まれた。あまりの眩しさで、目が開けられない。

それから、しばらくの時間が流れただろう。やっと辺りが暗くなってきた、目を開ける。すると、そこには見慣れない、石の壁があった。ところどころに光源があり、それらはマナの力で光っているということが感じられた。だが、それ以外は辺りを見回しても、何も無い。それに、薄暗くて何だか気持ちが悪い。

「ここはどこなんだ？」

後ろを振り返りながら呟いた。後ろには、とても重そうな扉がある。今の状況で、唯一ついえるのは、僕の部屋でないことだ。

僕以外に人の気配も無いし、こんなところにおいても仕方がない。そう考えた僕は、この部屋から出ることにした。

その瞬間、扉のそばに一人の女性が立っていたことに気がついた。身長は僕よりも十センチ以上高く、容姿もとても美しい。そして、スタイルも凄く良く、今までの人生で一番美しいと思った女性だろう。その姿に見とれていると、女性は僕の前でひざまず跪いた。

その叙沿いの態度に思わず驚いてしまったので、とっさに言っていた。

「いきなりどうしたんですか？ 何がどうなっているんですか？」  
僕はとても慌てていたため、言葉をはっきりと発音できていない。そんな僕の様子を悟ってか、女性は温かい笑みを浮かべて、僕に話してくれた。

「落ち着いてください。数百年ぶりにこの世界に戻れたのですから、

驚くのは無理もないでしょう。けれども、この世界に戻れたんですから、安心してください。もう魔王様を一人にすることはありません。」

数百年ぶりにこの世界に戻れた？ 何を言っているんだ。それ以上に戻れたら誰のことなんだ？ そんな困惑しているときに、女性の方は見つめる。

「申し送れました、私の名前は

「あの…、魔王様って誰のことなんですかね？」

僕が戸惑いながらそんなことを言うと、目の前の女性はとても驚いた表情をした。

「魔王はアデム様以外におりません。魔族一同、あなたのお帰りを心待ちにしておりました」

そんなことを言われても、僕は人間で、魔王なんて言われる要素なんて一つもない。何かを傷つけたり、争いごとは好きではない。

「僕の名前は、上月 渉。アデムなんて名前じゃない。それに、僕はただの人間で、魔族でも無いんだ。もう一つ言わせてもらうと、いきなりこんな世界に飛ばされて、困ってるんだ」

僕がそう言うと、女性は全く信じていないようだった。

「またまたご冗談を。いくら異界に送られたといえど、魔王様が死ぬわけが無いんですから。これで、憎き人間に反撃が出来ます」

嬉しそうにへブンさんが言っていたので、僕はここまでの状況を整理して、仮説を立てる。

魔王という奴は、数百年前に異界（つまり僕達が暮らしていた世界）に送られたんだろう。だけど、送られた世界にはマナが少なく、魔王の力をもってしても何も出来なかった。だから、こちらの世界に帰ることが出来なかったんだろう。

「どうやって、僕をこの世界に呼んだんですか？」

「私が魔王様をこちらの世界に呼び戻す魔法を開発し、それで呼び戻したんです。そのときに、魔王様の髪を媒体にして呼んだので、魔王様以外こちらの世界に呼ぶことは出来ません」

自信に満ちた表情で、そんなことを言っていた。僕が魔王でなくても、魔王の子孫だということは考えられる。魔法なんて物が使えたんだから、そのくらいは信じないとダメな気がする。

「何度も言うが、僕が魔王じゃない。推測なんだが、僕は魔王の子孫なんだ」

その言葉に、へブンは目を丸くした。今ならすっかり話を聞いてもらえると思った僕は、続けて言う。

「僕の世界は、とても世界の力が少なく、魔法なんて誰も使えないんだ。だから、魔王も何も出来ずに死んでしまったと思う。だけど、ただ死んでしまうのが嫌だったのか、自分の遺伝子を僕達の世界で残したんじゃないかな。これは、僕の仮説だから証拠なんてないけど」

僕がそう言うと、へブンはとても悲しそうな顔をした。

「そうですか……。でも、あなたは魔王様の子孫なのなら、あなたは魔王様です。アテム様の名前を継ぐべきなんです」

強い意志を感じる瞳で僕を見た。その瞳は、深い紫色をしていて、何だか吸い込まれてしまいそうなほど、美しかった。

「だけど、今は見とれている場合じゃない。僕はへブんに言った。」

「へブンさんの期待に添えなくて悪いけど、僕の魔法では大きなことは出来ない。せいぜい、小さな火を起こしたりするぐらいかな」

自嘲気味に笑いながらそう言うと、へブンは信じられないといった表情をしていた。

「そんなのは嘘です。私は信じません。今すぐ手加減などせずに、魔法を使ってみてください。この壁は、魔法を打ち消す素材で出来ていますので、どれだけ強い魔法を使ってもかまいません」

そんなことを言われても、出来ないものはできなただけだな。

「出来ないよ。へブンさんの期待に応えられるような魔法はね」

すると、へブンは僕の喉元に剣を突きつけてきた。首筋に剣

の先が当たって、剣の先から血がポタリと地面に落ちた。だけど、不思議と恐怖も痛みも無い。

「出来ないというのなら、ここで死んでもらいます。力が無い魔王様なんて必要ありませんので」

先ほどまでとは違い、鋭く冷たい瞳で見つめてくる。でも、その姿からは、恐怖よりも美しさを感じた。

殺気なんか感じたことが無い僕でも、今ヘブンさんから放たれている物が殺気だと分かる。気の弱い人間だと、この場で泡を吹いて倒れてしまっただろう。だけど僕はいたって冷静に言った。

「わかったよ、すればいいんだろ。集中できないから、この剣をしまってください」

「妙な動きをしたら、魔王様といえど命は無いと思ってください」  
そう言って、剣をしまってくれた。だからと言って、事態が好転したわけではない。僕の命を簡単に奪える人が目の前に立っていて、力が無いということが分かれば、すぐにくるされてしまっただろう。さて、どうしたものか。このまま考えていても仕方が無い。しょぼい魔法でも、殺されないということをお願いおう。

世界に満ちているマナを全身に送り込む。他の人は知らないが、僕の魔法はこの作業から始まる。僕の世界の感覚で勢い送り込むと、自分の世界では考えられないぐらいのマナが、勢いよく入ってきた。なんとなく、やばい感じがする。

「ヘブンさん、離れておいた方がいい。とんでもなく、まずいことが起きる気がする」

「私自身も魔法の使い手、ある程度なら防げますので」

自信に満ちた表情でそんなことを言って、離れる気は無いようだ。「どっち向きだったら、人がいないんだ？　もしも貫通とかしたら危ないだろ」

マナがどんどん入ってくるのが面白くて、体内に入れながらヘブンさんに質問をした。

「一応、こちらなら外ですけど」

そう言って、扉とは逆方向の壁を指差した。僕はその壁の方を向く。そして、体内にマナを入れるのが、苦しくなってきた。

「今回は、炎の呪文ということだ」

そう言って、一気にマナを体内から送り出す。その次の瞬間、僕の右手からは、凄まじい炎が勢い良く飛び出した。僕の右手から太いビームが放たれているみたいだと思った。

その炎の勢いは止まらず、壁に穴を開けたときに僕が放つのを止めた。残った魔力で、空いた穴を氷付けにする。体験したことが無い事態にもかかわらず、とても冷静だった。

それから、ヘブンさんの方を見ると、壁を見てただ立ち尽くしていた。ひょっと、するとこの壁を壊したのがまずかったのかも知れない。

「自分でもこんな凄いやとは思ってなかったんだ。壁壊しちゃってごめんなさい」

少し言い訳をした後、深々と頭を下げた。すると、ヘブンさんは慌てて言う。

「頭を上げてください。魔王様は何も悪くありません。悪いのは、少しでも魔王様を疑った私です。この罪は、どのようなことをしても許されるものではありません」

跪いて、そんなことを言ったので、慌ててフォローを入れる。

「ヘブンさんも悪くないですよ。僕は魔王ではなかったんだし、強いかどうかも分からなかったわけじゃないですか。だから、あの判断は正しかったと思います。ですから、そんなに自分を責めないでください」

笑顔でそう言つと、ヘブンさんは跪きながら、

「私を呼ぶときはヘブンと呼んでください。魔王様にヘブンさんと呼ばれるのは、恐れ多いです」

そして、一呼吸置いてから、ヘブンさんは続けた。

「私は先ほど、本気で魔王様を殺そうと思いましたが。それでも、私を生かすというのですか？」

へブンさんのその言葉に、僕は少し考えた。実際、命を狙われたのは事実だろう。だけど、あのときのへブンさんの行為は間違っていたと、僕は思わない。きっと、魔族という種族を守るために、仕方が無かった行為だろう。

「そうだな、だったら一つだけ罰を与えよう」

僕がそう言うと、へブンさんは跪きながら聞いている。

「僕がへブンさんと呼んでも、絶対に文句を言わないこと。それで、今回は不問にするよ」

僕は悪戯っぽく笑いながらそう言うと、へブンさんはとても狐につままれたような表情をしている。なんだか、へブンと言えるような気がしなかったので、僕にとって都合がいい罰なのだ。

少し、自分の権力を利用しすぎているような気がするが、仕方が無いだろう。だけど、へブンさんはまだ何も言っていない。

それから、少しの沈黙の後、へブンさんは慌てて言った。

「本当にそれでいいんですか？ 私は魔王様に言われたのなら、従いますが」

「じゃ、もう一つ付け足そう。魔王様じゃなくて、涉って呼んで僕の本名が、上月 涉だからさ。別に本名にちなんだものなら、なんて呼んでもらってもかまわないけど」

そう言うと、言っても無駄だと諦めたのか、「わかりました」と笑顔で頷いた。

この世界で、そんなことが起きるか分からない。

だけど、自分に出来ることがあるなら、協力して行きたい。誰かを傷つけることなく、進めるのなら。

僕はへブンさんに連れられ、薄暗い部屋を出た。すると、ゲームの城をイメージさせるような廊下が広がっていた。その道のところどこに、不気味な甲冑などが置かれていたりする。薄暗いのも、不気味さを倍増させる。

「なんだか、不気味ですね。何かが出てきそうだ。僕は力が無いか

ら、何か出てきたら助けてね」

「心配なく。この辺りは、私達の仲間しかいませんので、襲われることはありませんから。魔王様の魔力があれば、腕力は無くとも大丈夫です」

そんな会話をしながら歩いていくと、へブンさんが急に立ち止まった。どうしたのかと思い、へブンさんの前にでる。

廊下を眺めていても何も見えない。薄暗い明かりが、辺りを照らしているだけだ。

「へブンさんどうしたんですか。急に立ち止まるから…」

振り返りながら言うと、僕は言葉を無くした。その原因は、へブンの後ろに何か得体の知れない者がいたからだ。

骸骨…。そう、骨が鎧を身にまとってへブンさんの後ろにいたのだ。

「どうしたんですか？ 顔色が良くないですよ」

へブンさんが心配して尋ねてきてくれた。しかし、僕は怖くて声を出すことが出来な。だけど、このままではいけない。そう考えた僕は、必死の思いで指を指した。すると、へブンさんが振り返った。

「スケイルじゃないか。どうしたんだ、こんなところに突っ立ってへブンさんが、平然とした様子で骸骨に話しかけた。そのことも驚いたのだが、僕は次の瞬間、更に驚くべきものを目にする。

「姉さん、酷いことを言いますな。わしかて、魔王様の姿を一目みたいと思っ、ここに来たんやないですか」

骸骨が大げさな手振りでへブンさんに言う。なまった言葉遣いが、僕の緊張を少しほぐしてくれた。そんなことを思えたのはつかの間、骸骨は頭をこちらに向けた。怖くてとっさに顔を背けたが、骸骨はすぐにへブンさんの方を見る。

「ところで、このひ弱そうな奴なんなんですか？ どう見ても人間にしか見えへんのですが。ひょっとして、魔王様への貢物ですか。それやったら、若い女子の方が喜ばれる…」

「話しの途中ですまないが、一つだけ言わせてもらおう。今、スケイ

ルの目の前にいる者こそが、私達が心待ちにした魔王様なのだ。魔王様の細胞を持っているから間違いない。それに、魔王様は限りなく人間に近い風貌をしていたと聞くしな」

ヘブンさんがそう言うと、骸骨は小ばかにしたように言う。

「やれやれ、魔王様が戻ってくたさったら一安心やと思っていたのに。こんな弱そうになられて残念や。そもそも、こんな弱そうな者が、魔王様かどうかも疑わしいな」

「このお方が、儀式の間にある壁を破壊した。そう言っても、お前はこの人の実力を疑うのか」

ヘブンさんは機嫌が悪そうに骸骨に言う。すると、骸骨の顔？

が少し驚いたように見え蚊と思うと、先ほど僕たちが出てきた部屋に入っていく。どうやら、あの部屋の名前が儀式の間というらしい。それからすぐに出てきて、骸骨は僕の目の前に来た。

「ほんまに魔王様なんですな。疑ってすみませんでした。でも、そんな体からあの壁を壊すなんて、力は凄いですね」

そう言って、僕の背中を思いつきり押したので、僕は吹っ飛んでしまった。その距離は六メートルぐらいだったが、僕は浮いたまま止まっていた。あの骨のどこから力が出ているのかわからない。そんなことを思っていると、

「魔王様は力があまり無いのです。第一師団長のあなたがそんなに思い切り叩けば、吹っ飛ぶに決まっています」

ヘブンさんが僕のところに来て、ゆっくりと地面に下ろしてくれた。地面に落ちずにすんだのは、ヘブンさんのおかげだったのだろう。

「だったら、どうやってあの壁を壊したんですか？」

「魔法です。私だって信じられませんでした。あの壁は、魔法では絶対に壊れない物だと思っていましたので」

ヘブンさんがそう言うと、骸骨はとても驚いているようだった。

この頃には、骸骨に対する恐怖心は薄れていて、表情の変化もつかめるようになっていた。

「さすがは魔王様ですな。器が違いますわ」

大きな笑い声を上げながら、骸骨は僕に言う。調子がいいと思  
いながら、こういったタイプの人？ は嫌いでない。

「おっと、自己紹介がまだでした。わしの名前はスケイル・ピュー  
リッて言います。以後お見知りおきを」

そう言っつて、深々と俺にお辞儀をする。なんだか、相手が名乗っ  
たのに、自分が名乗らないのも悪いと思っつて、自己紹介をした。

「僕の名前は上月 渉。呼び方は、名前にちなんだものなら何でも  
かまわないよ」

そう言っつと、スケイルは不思議そうな表情をした。それを見たへ  
ブンが、慌てて言う。

「渉は魔王様の子孫で、以前の魔王様と同一人物ではない。だから、  
この世界のことは何も知らず、色々と困ることもあると思う。そう  
いったことは、我々が全力でサポートしていきたいと思っつている」

へブンがそう言っつと、スケイルは納得をしたようだ。

「了解です。わしとしては、子孫であろうがなんだろうが、信用で  
きる人物で、力があれば文句はありまへん」

スケイルはそう言っつて、僕に手を出してきた。握手をしたいのだ  
ろうか？ 僕が手を出すと、スケイルは手を思い切り握り締めてき  
た。力が強いので、物凄く痛い。

「これから、わからんことがあつたら、遠慮なく聞いてください。  
わしにわかることなら何でも答えますんで」

そう言っつと、僕の手を離し、「それじゃ、また」そう言っつて、廊  
下の奥に歩いていった。手を見ると、赤くなつていた。だけど、悪  
そうな人ではないので、安心をした。これからは、ああいつた変つ  
たのも、人とちゃんとみなしていこう。

「僕の世界には、ああいつた姿の人はいなかったから驚いたけど、  
いい人そうだね。ここでなら、安心して暮らしていけそうだ」

何故だか知らないが、この城の中は安心できる。僕の祖先が魔王  
だったということが、関係しているのか？ そんなことを思いなが

ら、へブンについて歩いていく。

すると、目の前と、左手に扉が見えてきた。

「まっすぐ行きますと、食堂があります。そして、左手は魔王様の部屋。つまり、渉の部屋になっていきます。食事は部屋にお運びいたしますが、食堂で食べることも出来ません。以前の魔王様は、他の者と関わるために、食堂をよく利用されていました」

そんなことを笑顔で話しながら、へブンさんは左手の扉を開けてくれた。その中に入ると、僕は驚いた。

魔王の部屋といえば、悪趣味な髑髏やら、気持ちが悪い物がたくさんあると思っていた。けど実際は、とても綺麗に整理されている。綺麗な風景画、収納性がよさそうなタンス。それに、とても柔らかそうなベッドや、便利そうな小物入れがあるぐらいだ。

普通の家と違うところといえば、マナで光るシャンデリアがあるぐらいだ。

「魔王様が使われていたときのままですので、渉が使いやすいようにしてもらってかまいません。シャンデリアの明かりの調節は、ベッドの近くに置いてあるスイッチでしてください。私はこれで失礼しますが、もし何か御用があれば、このお守りに魔力を流し込んでください。そうすれば、私がすぐに参りますので」

そう言って、へブンさんは部屋を去って行ってしまった。仕方が無いので、魔王の部屋を自分の使いやすいように変えるため、整理を始めた。

まずはタンスを開ける。すると、そこには、僕らの世界と同じような服が掛けてあった。サイズもちょうどで、僕が着ても問題なさそうだ。この世界の文化と、僕達の世界の文化は、そんなに違いが無いのかな。そんなことを考えながら、小物入れの整理を始めた。

そこには、たくさんの綺麗な宝石が、箱の中に並べられている。その箱をどけると、手紙が出てきた。その手紙には、僕にも読める言葉で、この手紙を見た者へ。そう書かれていた。

僕はその手紙を開けて、読んで見る。すると、その手紙には、驚

くべき内容が書かれていた。

この手紙を読んでいる者がいる。それは、私がこの世界に存在して  
いないということだろう。もし、この部屋をこれから使うのなら、  
いくつか教えておこう。

タンスの中に入っている服は、開ける本人が望むような服が入って  
いる。これは、私が施した魔法のせいだ、そういう風になっている。  
だから、次に開けたときも同じ服があるとは限らない。それと、た  
まに魔力の補充をしてやらないと、服が出てこないから注意をして  
くれ。

小物入れにある宝石だが、あれには膨大な魔力が詰め込んでいる。  
いざというときには、少量の魔力を込めて投げる。そうすれば、宝  
石の色に応じた効果が得られる。

なるほど、魔王って凄い人だったんだな。そんなことを考えなが  
ら、文章を読んでいると、最後の方に部屋の説明ではない、感じの  
違う文章があった。

最後に、私の跡を継ぎ、魔王になる者に頼みがある。この手紙を  
読んだとき、魔族と他の種族が対立しているのであれば、争いを避  
けるようにしてほしいのだ。互いの文化の違いを認められないから、  
対立が生まれる。ということは、種族同士が認め合えば、対立が  
無くなるということだと思ふのだ。

私も戦争で、多くの人間やエルフを殺してきた。そんな私が言う  
のもおかしいのかもしれない。しかし、数多くの戦争をしてきたか  
ら分かる事もあるのだ。争いは、お互いに傷つけあうだけで何も生  
まない。争いは争いしか生まないのだ。

私の願いは、この世界を平和にしてほしい。ただそれだけなのだ。  
私の愛した、民や兵士達を頼む。

その文章を読んだ俺は、魔王という人のことが少しわかったよう  
な気がする。平和を望み、人が傷つかない世の中を願った。その前  
には、争いをしたかもしれない。だけど、間違いをせず分かる、そ  
んな人なんかいないと思う。間違いから学んだ魔王は、とても聡明

な人だと思った。僕がこの世界に来たのも、何かの縁だ。

このときに、僕は誓ったんだ。

この世界を平和にしよう。

何をしていいのかわからない僕は、気に入った服に着替えて、ベッドの上で寝転んでいた。ポケットに入っていたトランプだけは、服を着替えても持っておく。だけど、寝転んでいるのも何なので、手に使えそうな道具をいくつか、ポケットの中に忍ばせた。その後、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

ベッドから起き上がり、扉を開けると、ヘブンさんがいた。その姿は鎧ではなく、派手ではないが、ヘブンさんの美しさを引き立てる服だった。

「涉がどうされているのか気になったので、お邪魔したんですが。何か困っていることは無いでしょうか？ 私でよければ、力になりますか」

ヘブンさんはそう言ってくれたが、この部屋のことなら、さっきの手紙のおかげで、僕の方が詳しいだろう。

「だけど、せっかくの好意を無碍にするのも悪いので、僕は少し考えた後に言った。

「この城の中を案内してよ。それと、中にいる人の紹介をしてみらえると、ありがたいんだけど」

僕がそう言うと、ヘブンさんは嬉しそうに、「かしこまりました」と返事をして。案内を始めた。

僕が入ってきた扉の逆側に、扉があるのだが、ヘブンさんはそちらの扉から出る。それに続いて、僕も出ると、目の前には豪華に装飾された、空間があった。ヨーロッパにあるようなお城は、こんな感じなんだろうか？ そんなことを考えていた。

「ここが、王の間です。兵に命令があるときは、ここに呼んでいた、指示を与えてください。できることなら、私を通していただければ、ありがたいのですが。無理にとは言いません」

「僕は何もわからないから、へブンさんに相談させてもらおうよ。そうだ、へブンさんには、僕が思っていることを話しておくよ」

僕がそう言うと、へブンさんは目を輝かせて、こちらを見る。そんな目で見つめられると、言いづらいが仕方が無い。僕はへブンさんの目を見て話した。

「僕は戦いという手段でなく、この世界に平和をもたらしたいんだ」  
僕がそう言うと、へブンさんは驚いた表情をした。だが、その表情は、すぐに悲しみに満ちたものに変化していく。

「以前の魔王様も、涉と同じ主張をしておられました。魔王様も希望通り、私達は決して自ら戦いに挑むことはしませんでした」

そう言うってから、へブンさんは真剣な表情で僕を見つめた。

「この世界のことを知らないから、涉はそんなことが言えるんです」  
そう言うって、この世界のことを語り始めた。

「この世界は、魔族、エルフ、人間という三つの種族から成り立っています。魔族は力に優れており、エルフは魔力に優れています。人間は力も魔力も持たない代わりに、科学という独自の力を持っています。このことにもれ以外があり、力や魔力を持った人間がいたり、私のように強大な魔力を持った、魔族もいます」

なるほど、この世界は三つの種族から成り立っているのか。この世界の人間が持っている科学とは、僕の世界にあったような物だろうか？ そんなことを考えながら、へブンさんの話しを聞く。

「魔族とエルフは、他の種族と関わらないように、閉鎖的な場所です。暮らしていました。ですが、人間達は住む場所を広げ、私達の暮らしている場所を奪おうとしました。ですから、魔族やエルフは、人間達と戦いました。それをきっかけに、人間達との戦いが始まりました。人間達は、私達の姿が人間と違うから。そういった理由だけで、攻めてくるのです。それでも、涉は私達に武器を取るなどおっしゃるのですか？」

最初は冷静だったへブンさんも、次第に声を荒らげて僕に言う。  
ここは一旦冷静になってもらった方がいい。

「とりあえず落ち着いて。冷静にならないと、真実は見極められないよ」

僕がそう言うと、ヘブンは僕に謝り、深呼吸をした。これで、落ち着いてくれれば、冷静な話ができる。

「すみません、取り乱してしまいました。落ち着いたので話を続けます」

そう言って、ヘブンは話しを再開した。話しをしっかりと聞いておかなければいけない。そう思い、しっかりと耳を傾ける。

「本来関わりを持たないはずのエルフと魔族が、このままではいけないと、話し合いの場を設けました。争いを望まないエルフ達も、最近では武力行使を視野に入れ始めています。私達が出来るとは、もう何も無いのです。人間達を殺したいわけじゃない。ただ、私達の生活を邪魔しないでほしいだけなのです。争いになれば、自然は破壊され、動物達は死に、世界に満ちるマナも弱くなります。ですが、その選択をしなければならぬほど、私達は追い詰められているのです」

ヘブンの悲痛な表情を見ると、苦肉の策だということがすぐに分かる。僕は言葉を失ってしまった。

「涉に見せておきたいものがあります。ついてきてもらえますか？」

僕はうなずき、ヘブンの後ろをついていく。先ほどの扉とは違い、玉座の正面にある大きな扉を出て、少し開けた場所に出た。そこにも、鎧などが置かれており、重々しい雰囲気だ。

その空間を左に曲がり、開けた廊下に出た。すれ違う兵士達が、こちらに向かって敬礼をする。兵士達の姿は、人間の姿ではなく、獣に近かったが、僕は別に気にならなかった。

そして、廊下を道なりに進むと、階段が見えてきた。その階段をヘブンさんが上って行くので、僕も上る。そして、しばらく階段を上ると、屋上に出た。周囲を見渡すと、周辺に木造の家が立ち並び、その奥には森が広がっている。森の所々で、川や湖が見え、のどかな田舎のような感じを受ける。

「ここが屋上です。先ほど私達がいたのが二階で、ここが五階ですね」

そう言った後、ヘブンさんは言う。

「私はこの町で生まれ、この町で育ちました。私の父や母が守ってきた人や町、そして、兵達を私も守りたい。その結果、人間達やエルフと対立しようともかまわない。私はそういつた覚悟を持って、生きてきました。渉には、そんな強い覚悟がありますか？」

ヘブンさんの瞳は、僕の内面まで見抜けそうなくらい、透き通っていた。覚悟、そう言われると困る。

「だけど、力っていうのは誰かの笑顔を作るためにあると思うんだ。だから、争いなんかしちやいけない。僕が言っているのは綺麗ごとかもしれない。でも、誓ったんだ…。僕の力は、誰かを幸せにすることに使うって」

僕はヘブンさんの目をじっと見つめ、力強くそう言った。長い沈黙が続く。

「負けましたよ。そんな目で見つめられたら、私は何もいえませんが、人間達が攻めて来たら、私は戦います。渉はそれを止めないでください」

ヘブンさんは笑顔を浮かべ、僕に言った。僕は人を幸せにするためだけに、力を使うと誓った。だから、人を傷つけることは出来ない。

「渉はそれでいいと思います。以前の魔王様も、渉と同じくらい優しい方でした。ですから、そんなに暗い表情をしないでください」ヘブンさんに言われて、自分が暗い表情をしていることに気がついた。

「さあ、渉の希望通り、城の案内を始めます。しっかりついてきてくださいね」

ヘブンさんが明るくそう言ったので、そのことが本来の目的だということ思い出した。この城を案内されるのか…、長そうだな。そんなことを思いながら、僕はヘブンさんの跡をついていく。

僕は後悔した。ここから、八時間近くも休憩も食事も無く。歩けばなしになるのをしらなかつたから。しかも、町中で僕を魔王だつて紹介して回るから、いたるところで人ごみが出来た。このことで、魔王の人気というか、人望というものが分かつたのだが、知っていたのなら、僕は間違いなく頼まなかつた。そんなことを歩き終わってから思うのだった。

「もう疲れたんですか？ 本当に魔王様は体力が無いんですね」  
町を案内されているときに、僕が限界だと主張したので、ヘブンはようやく休みをくれた。綺麗な人がそばにいと頑張れる。そう思っていたのだが、限界はくるようだ。

町外れの丘で、座って休憩していると、ヘブンさんが川の水を、氷の器に入れて持ってきてくれた。魔法で水を創って飲んでも、マナに戻ってしまうため意味が無い。ヘブンさんが、歩いているときに説明してくれたので、僕は一つ賢くなっていたのだ。

「こういうとき、魔法って便利だね」  
そんなことを言いながら、僕は水を飲んだ。マナに戻るとしても、容器として使えば問題ない。この世界での生活は、思ったよりも快適そうだ。そんなことを考えていると、遠くから三人の小さな子どもが走ってきた。

魔族は、三種類に分けることができ、人間型と獣人型。そして、不死型の三つだ。ヘブンは人間型で、スケイルは不死型。獣が人間になったような人が、獣人型だという説明を受けたので、大体わかる。

走ってきた子どもは、男の獣人型が二人に、女の人間型が一人のようだ。

「魔王様、これ私達が一生懸命作ったんだ」  
女の子がそう言って、綺麗な花の首飾りを渡してくれた。嬉しかったのだが、突然のことで僕は驚いてしまった。  
「ひょっとしていらなかつた？」

男の子が困ったように尋ねてきたので、僕は慌てて言った。

「そんなことないよ、突然で驚いただけさ。ありがとう、大切にするよ」

僕がそう言うと、子ども達は嬉しそうにしていた。物を貰うだけでは悪いので、僕は手品を見せることにした。

「このカードの中から、好きな物を一枚選んで。選んだら、そのカードを覚えて、僕に見えないように戻してね」

そう言って、僕はトランプを差し出した。子ども達は一枚のカードを選んで、じっと見つめる。覚え終わったのか、トランプを山に戻して、渡してきた。

「これをしっかりと混ぜるだろ。これで、君達が選んだカードはどこにあるのか分からないね」

僕がそう言うと、子ども達は大きく頷いた。へブンさんのほうを見ると、彼女も真剣にこちらを見つめていた。

「君達が選んだカードを当てよう。君達が選んだカードは」

そう言いながら、へブンさんの服にあるポケットの中から一枚のカードを取り出した。

「このカードじゃないかい？」

僕が笑顔で尋ねると、子ども達はとても驚いたような表情をした。それと一緒にへブンさんもとても驚いているようだ。

「魔王様すごいね。これが、魔法ってやつなの？」

「魔王様、どうやったの教えて、教えて」

子ども達が、興味津々といった感じで、僕に質問攻めをしてくる。その後ろで、へブンさんがとても驚いた表情をしている。

「もうそろそろ、帰るわよ」

子ども達はその声に反応をしたので、この子達の親のようだ。三人の母親が、ゆっくりとこちらに歩いてきたので、僕は頭を下げる。すると、母親達は僕に深々と頭を下げて、丁寧な挨拶をしてくれた。僕は子ども達に、別れを告げ、へブンさんと一緒に、城に向かって歩き始めた。

「先ほどの魔法はどうやったんですか？ 魔法を使ったような感じ

がしなかったので、気になっていたのですが」

へブンさんが尋ねてきたので、僕は笑みを浮かべて言う。

「あれは魔法じゃなくて、手品と言っただけど、その方法は教えるわけにはいかないな」

僕がそう言うと、へブンさんは真剣に悩んでいるようだった。教えてもらえないなら、自分で考えようとしているのだろう。手品というものは、悩むよりも、そういう物として楽しんでもらえた方が嬉しいんだけど。そんなことを思いながら、悩んでいるへブンさんを見つめていた。

この世界も僕らの世界と同じで、一日は二十四時間で、太陽が昇り、夜になれば月が見える。そんなサイクルを、繰り返しているらしい。

城につく頃には、空は茜色に染まっていた。今日はこちらに着てから、十時間ぐらい色々なところを回っただろう。正式に魔王が来たど、町や城に発表されるのは明日らしいのだが、ほとんどの人がすでに知っているだろう。そう思ってしまうほど、たくさんの人と一日で出会った。

「町や城を見て回って、どうでしたか？」

へブンさんが明るい表情で尋ねてきたので、僕も笑顔で返事をする。

「とても楽しかったよ。城にいる人も、町にいる人も、いい人ばかりだったし。それに、みんなが楽しそうに生活しているのがいいね」

僕がそう言うと、へブンさんは嬉しそうに、

「わたるに喜んでもらえて、私も嬉しいです」

そんな会話をしながら、僕達は城の中に入っていく。十時間も何も食べていないのに、あまり空腹を感じていないことを、不思議に思いながら自分の部屋を目指し歩いていく。

すると、へブンさんが僕に尋ねた。

「そろそろ、食事の時間ですが、今日は食堂で食べますか？」

僕は自分の部屋で食べても退屈そうなので、食堂で食べることにした。そのことをヘブンさんに言うと、嬉しそうに、

「では、今から一緒に行きましょう。今日は、朝食しか食べていないので、少々おなか为空きました」

そう言っただけで階段を上り、食堂の扉を開けてくれた。すると、食堂の中には、すでに多くの人が集まっていた。

「私が料理を持ってきましたので、渉は座って待っていてください」

ヘブンさんは、明るい表情でそう言っただけで、カウンターに向かった。近くにあったテーブルに座り、ヘブンさんが戻ってくるのを待つ。すると、僕の横に座ってくる人がいた。

「渉さん、横に座らしてもらっても、いいですかね？」

声のほうを見ると、スケイルがいた。僕が、「どうぞ」と言うと、スケイルは横の椅子に座った。スケイルは普通の服を着ていたが、どう考えても骨だ。何か食べると、地面に落ちてしまうのでは無いか？ そんなことを考えながら、スケイルを見ていると、

「渉さん。ひよっとしたら、わしが食事をする、体のあちこちから食べ物落ちると思っただけですか」

その的確な指摘に、僕は小さく頷いた。すると、スケイルは大笑いしながら返事をした。

「わしらみたいな、不死型の者は、見た目は骨ですがしつかりと体の機能はあるんです。機能と言っても皆さんと違って、魔法の力で食べた物を分解したりするんですよ」

スケイルの説明を聞いて、凄いなだなど思っていた。この世界には、僕がいた世界と違う。そのことが、とても新鮮で楽しい。スケイルの説明を聞いているときに、ヘブンさんが食事を持ってきてくれた。スケイルは、ヘブンさんに軽く頭を下げる。

「食事のときまで頭を下げなくていい。そんなことを気にしていいは、美味しい料理に失礼だから」

にこやかな表情で、ヘブンさんは言った。料理は意外と普通で、パンとシチューにサラダだった。スプーンを使い、シチューを口に

運んだ。

「美味しい。僕がいた世界の料理の味とは違う気がするけど、それでも美味しいよ」

本音を言うと、料理は口に合わないと思っていただけけど、これならいくらでも食べられそうだった。

僕が食べている姿を、ヘブンさんは嬉しそうに見つめていたので、「ヘブンさんも食べなよ。美味しいシチューが冷めるよ」

「そうですね。私も頂くとしましょう」

そうやってヘブンさんも食事を始めた。二人から、この世界の色々な話を聞きながら、僕は料理を食べた。争いが起きなければ、この世界は住みやすい良い場所だ。素直にそう感じている自分がいる。魔族の領地と、エルフの領地は山に囲まれているということ。その合計面積と、人間の領地がほぼ同じだということ。人間の数は、魔族とエルフの三倍ぐらい、いるということ。最近、人間が新しい武器を開発したという話などを聞いた。それらの話しが終わる頃に、僕達は食事を終えていた。

「色々と話しをしてくれてありがとう」

僕は二人にお礼を言って、席を立った。そして、食器を片付けてから、自分の部屋に戻った。そして、今日は疲れたので、風呂に入って寝ることにした。

僕は風呂場に向かうと、浴槽が無く、シャワーしかないようだった。そのことに、少しショックを受けながら、体と頭を洗った。シャンプーなどはあったので、助かったのだが、風呂に入りたかった。そんなことを思いながら、風呂場から上がり、体を拭く。そのときに思った。

ひよっとすると、魔法を利用しているから、風呂を溜められないのかもしれない。それを確かめるために、体を拭いたタオルを持っていると、十五分ぐらいで乾いたのから、間違いなく魔法の力を利用してしている。どうりで風呂を溜められないわけだ。僕は納得しながら、タンスを開けて、パジャマを取り出す。本当に便利なタンスだ。

今日は色々なことがあった。これから、大変かもしれないけど、僕に出来ることがあるなら頑張ろう。そんなことを考えながら、眠りに落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9652b/>

---

僕は魔王

2010年10月10日03時04分発行